

敵機の去った後に必ず日用品や学用品等に似せたもので強力で精巧な小型爆弾を投下して去っていく事があった。

子どもたちはそれを本物の学用品と思い拾って手にした瞬間爆発し、その場で即死した子や小さな手や足を切断した子もあった。

また、時限爆弾等も多く投下されて、後々まであちらこちらで恐ろしい爆発があった。爆発した跡には直径二十メートル位の大きな穴があいていてその威力の大きさに驚いた。そして五十年経った今でも爆弾が民家や河川敷等でも爆発している。

総てに飢えた日本人の心を弄（もてあそ）んだ卑劣な手段でどんなに憎んでも憎みきれないと思った。

二十年の初め頃は夜の爆撃に焼夷弾が使われ、投下されると一瞬に広

範囲の空が真赤に焼け、熱風が遠い所まで吹き真昼の様に明るくなるほど家屋が多く焼失していた。

この頃には商店街通りも民家も公共物も無差別に被災地となっていた。

太平洋の方角からいつも同じコースで来襲して来る敵機を何故日本は撃墜しないでいるのだろうかと疑問に思っていた。

しかし、毎日の新聞やラジオの報道では大本営の発表に依ると日本軍は益々戦績を挙げて、各最前線の島（南太平洋上の多くの島を日本軍が占拠してそこを攻撃の基地にしていた）においてアメリカ軍に多大なる損害を与えている…と具体的に数字を発表した。戦艦、巡洋艦、駆逐艦、戦闘機、爆撃機、軍用基地…と。

私達は日本は必らず勝利に向って

いるのだと信じていたが、大本営は虚偽を伝えていた。

私の父は日本は決して勝ってはいない。負け戦になっているといつも小声で云っていた。

実際は戦うにも戦えないほど逼迫（ひっぱく）し追い詰められていて風前の灯であったのだった。

その頃戦争に対して不満や不安な事などを口にするると非国民と烙印が押され処罰された。

憲兵が街中に目を光らせ取り締まりが厳しく私の家に住民の様子を探りに来ていた。

最前線の兵隊に送る慰問袋を一般の家庭に強制して私の家に集められていた。物資の不足の折で大変だったが戦地の兵隊さんへの感謝の気持ちから必らず作って中に手紙も添えた。その手紙の内容も全部検閲され